



[ホーム](#) > [フォーラム/セミナーの報告](#) > 9目標に関連するセミナー、ワークショップ等

第14回フォーラム「医療の改善活動」全国大会 in 沖縄

改善活動の継続こそが「医療の質向上」に繋がる

第14回フォーラム医療の改善活動全国大会 in 沖縄 大会長
宮里 善次（社会医療法人敬愛会 中頭病院院長）

去る10月12日・13日、沖縄県宜野湾市におきまして第14回フォーラム「医療の改善活動」全国大会 in 沖縄を開催いたしました。大会は全国35都道府県・130施設より512名の参加者を迎え、鼎談、教育講演、事例発表115演題を行いました。

今大会のテーマは「展望から実践へ」と題し、改善発表の取り組み内容が密に交流され、参加者が改善に取り組む本質を理解することで展望を描き、所属する医療機関で実践されることを目的としました。



宮里善次大会長

大会は医療のTQM推進協議会理事長、上原鳴夫の「コアバリューを意識した改善活動への取り組み」に期待し、各々の取り組みが日本の医療、ひいては世界の医療の質向上へと繋がることに期待する」という挨拶に始まり、大会長宮里善次の「敬愛会におけるTQMの取り組み」と題した基調講演を皮切りにスタートしました。

初日の鼎談「バージニア・メイソン医療センターに変革をもたらしたもの」～ものづくりの原点を探る～では、安藤廣美氏（麻生飯塚病院特認副院長）のファシリテートにて、中尾千尋氏（新技術研究所代表取締役術主）と立川洋一氏（大分岡病院副院長）が実現場を想定した改善のロールプレイを行い、実践的かつ具体的なトップマネジメントによる改善方法が教示されました。

2日目の教育講演では、「ナレッジマネジメント」～学習する組織づくり～と題して中山康子氏（株式会社東芝研究開発センター研究企画部企画担当参事）が登壇しました。「コンピュータ技術の進歩がもたらした弊害として、公開的であった作業場が閉





鎖的なパソコンの中へと移行され、作業者の思考プロセスはさらに読み取りづらくなり、先輩の背中から学べなくなった時代に突入した。暗黙知を可視化し人を育てるシステムを組織で構築することにより、個の知が組織知へと変換され、継承・共有し、活用することで製品（サービス）の価値を最大化することが出来る」といった内容に、多くの聴講者が聞き入りました。

2日を通して 115 題の事例発表においては、「医療の質」を追求する真摯な姿勢が本大会のテーマに沿って展開され、白熱した質疑応答は割り当てられた発表時間の調整に苦慮させられる程となりました。

医療行為とは、本質的にリスクを伴う行為といわれるなか、発表者は安全を基軸とし、確実に効率的にそして E S ・ C S を追い求める様々な発表を行い、22 演題の優秀賞が選出されました。

一昔前の一方通行的な医療者側からの医療提供は跡形も無く消え去り、今日の医療はチーム、そして組織横断的な活動へと進化を遂げつつあります。この進化の過程には様々な課題に対する改善活動があり、この改善活動の継続こそが「医療の質向上」に繋がると再認識する大会となりました。